

第四百六回 青葉会

令和二年二月二十七日(木) 午後二時〜五時 文京区民センター会議室

〈選者〉

◎ 川口孤舟

〈出席者〉

今井紀久男 川口孤舟 久米五郎太 小西弘子 在間千恵 佐藤ただしげ(忠重)

〈投句〉

朱牟田恵洲 土谷堂哉 豊田ゆたか 土谷孝子(夫人) (選句のみ)  
伊賀山そらお 柿崎忠彦 小早健介 古田昇 宮内規雄 山崎亜也 山田けい子

〈紙上選句〉

山内天牛 渡邊盛雄  
赤田堅 安部眞希子 柿崎忠彦 重枝孝岳 庄司龍平 高橋敏郎 早川允章  
福島正明 村田くに子 山本三恵

《五選句》

十一

句集成る梅見にひとり茶碗酒

紀久男 (忠・五・千・た・龍・敏・堂・

九点

◎ さまよへる巨船令和の蜃気楼

盛雄 (堅・紀・忠・孤・弘・敏・堂・

七点

春雨や動くものなき禅の寺

恵洲 (堅・眞・忠・孝・敏・堂・夫

六点

◎ 小さき手で声は大きく豆を撒き

忠彦 (眞・紀・孤・ゆ・允・く

五点

◎ 春浅し猫の道ある坂の町(尾道)

けい子 (眞・紀・忠・孤・弘・三

◎ それぞれの思ひの句集梅咲けり

忠彦 (紀・孤・た・龍・允

◎ 津軽にはつがるの言葉春の雪

孤舟 (五・弘・敏・夫・く

◎ 最終の講義終えし日風光る

五郎太 (紀・孤・弘・龍・正

四点

◎ コロナ禍は人災なりと亀の鳴く

健介 (堅・眞・紀・孤・五

茶漬喰ふみつ葉の緑黒備前

亜也 (紀・千・孝・ゆ・正

春寒し寄木細工の箱開かず

孤舟 (千・恵・ゆ・正

しやぼん玉吹きて未来のあるごとし

全 (孝・恵・龍・敏

雛の絵の手拭ひ飾るひとり居に

千恵 (紀・五・ゆ・く

◎ 意味知らで歌ふ幼(おさを)の早春賦

恵洲 (龍・堂・夫・允

(◎:歌の曲名で季語になるのか疑問)

三点

◎ 点滴の確と落ちゆく春隣

堂哉 (孤・五・恵・允

◎ 春一番花粉は季語にあらずして

亜也 (孤・千・恵・三

(「杉の花」「杉の花粉」「花粉症」は季語の由)

二点

◎ 春空へ階段浅き銀座線

弘子 (五・恵・堂

探梅やガイドブックの靴印

全 (眞・千・三

ただ涙夜間中学卒業生

健介 (眞・敏・く

(同期の故・金子宏一郎を思い出しました)

◎ 手を引かれよちよち歩きの梅見かな

そらお (孤・た

電車内くさめをそつと抑え込み

全 (忠・千

猛さんへ

友癒へよりハビリ励む春の汗

紀久男 (忠・た

堀越ゆる猫に陽炎飛ぶびつかり

孤舟 (紀・恵

武器とせしりベラルアーツ梅真白

五郎太 (紀・夫

(弘子さんが聴講したことのある芳賀徹他界)

◎ 水底に葉っぱ重なり春の鯉

弘子 (孤・龍

もう聞けぬあのボヤキ節この春は

千恵 (堅・紀

(野村監督)

一点

草萌ゆる狭庭の土塊(つちくわ)起(おこ)しつ  
都井岬馬棚(まき)に寄す波菫草  
恋猫の無断外泊仕置きする  
露のとう少おし笑顔覗かせて  
春浅ししまなみゆるり赤き塔

ゆたか(夫・く)  
全(た・孝)  
昇(弘・堂)  
規雄(堅・孝)  
けい子(紀・三)

(しまなみ海道)

海老蔵で豆撒き最後成田山  
娘来て小さき書齋へシクラメン  
神品(しんぴん)の仁左の菅公梅香る  
出来るだけ人と距離置く二月かな  
銅剣が三百余本浅き春

天牛(允・正)  
盛雄(弘・敏)  
紀久男(た)  
五郎太(紀)  
全(紀)

(出雲と大和展)

◎ フットサルコート(フットサルコート)の歓声黄水仙  
雪予報(雪予報)までも都心のあわてぶり  
春隣る未知ウイルスが水を差す  
初場所の幕尻賜杯もらひ泣き  
ふくいくと香る梅香に春を知る

弘子(紀)  
千恵(孤)  
全(紀)  
全(忠)  
忠重(紀)

(季重なり)

広々と視野一杯に麦青む  
春雨の相合傘や若かりき  
春雨を得て黒土の匂ひ顛(を)つ  
啼きもせで狭庭の鶯疾く去りぬ  
ひしと抱く母の骨壺薄紅梅

全(忠)  
恵洲(た)  
全(孝)  
全(三)  
堂哉(紀)

(百二歳)

マスクして主治医に縋る母のこと  
春昼の香にいざなわれ寄るカフエ  
やり直しきかぬが人の世揚雲雀  
外つ国の肺炎疑ふ春の風  
クチュクチュと花開きけりヒヤシンス  
海老蔵の名よさらばなり京の春

全(紀)  
ゆたか(く)  
全(紀)  
昇(紀)  
規雄(紀)  
けい子(紀)

(五月襲名前に関西巡業)

白梅や郵便局への曲る角  
梅東風や思郷の念つとに湧く

天牛(紀)  
盛雄(堅)

● 次回青葉会

三月二十六日(木) 午後一時半〜五時 文京区民センター会議室

▲ 当季雑詠各自五句 投句二句

四月二十三日(木) 午後一時半〜五時 文京区民センター会議室

令和二年三月十六日

以上 文責 紀久男



一 今回は、偶々上京中の堂哉さんと奥様をお誘いして出席10名。投句は忠彦さんら9名。句集の完成を祝う句会として出席予定の天牛さんは奥様の介護、正明さんは花粉症、大阪の健介さんはコロナウイルス用心の為旅行中止と、三人共不本意なことになりました。開始前に400回記念句集を各自2冊、孤舟選者の第4句集「星空」(2月22日発行喜怒哀楽書房)を配布、皆様出来栄に驚いておられました。

堂哉さん土産の「松陰饅頭」(世田谷区)、弘子さん寄贈の三原堂の塩煎餅(人形町)、千恵さんの純吟「蓬萊」、惠洲さんの仏ワイン(手つけず持帰り)とチョコ、小生の純米大吟醸「鶴齢」(新潟の俳人・熊谷国男さんより)とおかきを賞味しつつ各々勝手に祝杯を挙げました。

句会には久しぶりの惠洲さんの洒脱な句評と大学の最終講義了えたばかりの五郎太さんの捌きが冴え、相当盛り上がりを見せました。御覧のように盛雄さんが好成績でした。

回覧は(一)眞希子さんからのFAX(二)天牛さんからのFAX(三)きさらぎ500回記念句集(四)厚徳社の請求明細書(250冊33万円)(五)小生のマンション260世帯一番の文人である篤(とく)一夫さんの400回句集感想文等々。

二 一灯さん・猛さんの退会  
玄人裸足のベテラン俳人である中野一灯さんと、名司会役の猛さんが二月末で当会をお辞めになられました。永いおつきあいでお二人には随分助けて貰いましたことに感謝申し上げます、厚く御礼申上げる次第です。

これからも俳句をお続けになられ、お気の向いた時においでになられますようお願いしたいと存じます。

三 関係者近詠

糖度表付さるる林檎こも格差 眞希子 孤舟選者の第4句集「星空」より自選12句  
家計簿も日記も買はで終活へ 全 漁火の揺れオリオンに紛れ入る  
何処へ逃ぐ手袋の手をポケットに 全 釣瓶落し水平線を褥(とこ)とし  
へいちやらと寒波駆け抜く半ズボン 全 陽炎の地軸傾け熱気球  
膝の上に花束のやう熊手置く 弘子 雪無音旧約聖書繙きぬ  
銀座裏小店に並べちやんちやんこ 全 地球儀に紛争はなし望の月  
冬日閃白馬の白尾金色に 全 金平糖のとんがりあまた山笑ふ  
杏の葉杏の色に枯れにけり 全 むささびの飛んで星夜の忍者めく  
文字盤を指すゆび冷えてさらぼひて 陽亮 なまはげの吠え星空を沸きたたす  
かなしみのほどの深さに冬帽子 全 蜘蛛の罫に月の雫の捕らへらる  
持葉買ふそれにて足れる年用意 全 吊革にひとりひとりの年の暮  
来ん年のことは来ん年大晦日 全 さへづりや山懐の禁漁区  
― 「森の座」 ― 3月号 薄暑光盲導犬は眼閉ぢ

白梅や絵馬は変身ペガサスに 正明 子の居ない静けさのあり雛の間 允章  
沁々(しみじみ)と陽水を聴く春の宵 全 茂吉忌や湯治の客も疎らにて 全  
棄て切れぬ重き心や鳥帰る 全 墨堤に日は燦々と桜餅 全

四 吉右衛門の句の初披露

― 小学館のPR誌「本の窓」三月号連載「吉右衛門の四方山日記」より  
初代吉右衛門の句碑(修善寺の新井旅館)

「鶯の鳴くがまゝなるわらび狩」に触発されて一句

● 跡取りとなるがまちがひ威光借(いこうがり)  
― 当代一の彼が謙遜して詠んだと思われまます。得意のスケッチも掲載されております。